

学習の系統性を意識した古典作品の教材研究

— 『竹取物語』を素材として —

西 一夫

1 はじめに

平成二〇年度の学習指導要領において、「言語事項」と称されていた部分が「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」へと大きく変更になった。この事項はさらに、

- ア 伝統的な言語文化に関する事項
- イ 言葉の特徴やきまりに関する事項
- ウ 文字に関する事項

と細分化されている。これに書写に関する事項を附すことによつて、言語事項全体が構成されている。なかでも「ア 伝統的な言語文化に関する事項」の設置は、小学校への古典の導入などとの理解がおこなわれた。とは言えこれによつて小学校の教科書にさまざまな古典関連の教材が掲載された事実からも、その影響の大きさが知られるであろう。

小学校では、これまでも短歌・俳句などの韻文を中心とした作品が教材化されてきた。これに加えて「昔話や神話・伝承（第一学年及び第二学年）や「易しい文語調の短歌や俳句」（ことわざや慣用句、故事成語（第三学年及び第四学年）と教材のジャンルが示され、さらに「親しみやすい古文や漢文、近

代以降の文語調の文章」（第五学年及び第六学年）と中学校との接続を意識した指導事項の構成・展開となっている。

中学校では「文語のきまりや訓読の仕方を知」（第一学年）ことが示され、古典の原文を読むことを前提とした内容となる。さらに「作品の特徴を生かし朗読する」（第二学年）も同然と判断できる。このような小学校・中学校の「伝統的な言語文化」の指導事項は、平成二九年三月に告示された次期学習指導要領においても基本的に継承されている。

本稿では小学校・中学校・高等学校での「伝統的な言語文化」や「我が国の言語文化」の学習に関連する教材であり、三校種に重複して掲載されている『竹取物語』を取り上げて、以下のような観点で教材化の状況を検討することとする。

1. 各校種における教材化の状況（採録箇所）
2. 学習の目標・手引き等の課題設定
3. 文学史に関わる記述
4. 教材化に際しての特徴など

これらの検討を通して、校種間連携あるいは系統的な学習指導のありようを示すこととするものである。

2 教科書の掲載状況

2-1 小学校教科書の掲載状況・目的など

現行の各校種における『竹取物語』の掲載状況から各教科書の傾向を把握する。小学校では五社五冊のうち二社二冊の教科書が以下のように掲載している。

【教出・国語538】五年

単元…日本の文化を考えよう

目的…今なお読みつがれている昔の物語を読んで、感想を書きましよう。

採録箇所…冒頭「いとうつくしうてゐたり」(現代語訳並記)

【光村・国語539】五年

単元…声に出して楽しもう 古典の世界(一)

目的…言葉のひびきやリズムを味わったり、様子を想像したりしながら、声に出して読みましよう。

採録箇所…冒頭「いとうつくしうてゐたり」(現代語訳並記)

両社とも第五学年であり、本文の冒頭部分から「いとうつくしうてゐたり」までを掲載する点と現代語訳を並記する点も共通している。このような共通項が複数指摘できるのに対して、「目的」には大きな異なりが見られる。「光村」は音声による「C読むこと」(二重傍線)の学習活動が中心であり、「教出」では「C読むこと」(傍線)に「B書くこと」(波線)を加えての学習活動となっている。これは単元名にも対応していると言え、教育出版社の「日本の文化を考えよう」と光村図書の「声に

出して楽しもう」とが両者の傾向の違いを端的に示している。

両社の学習活動(目的)を比較した場合、現行の学習指導要領では、以下の指導事項に対応している。

(ア) 親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章について、内容の大体を知り、音読すること。

教育出版社が「内容の大体を知り」を、光村図書が「音読すること」をそれぞれ重視した学習活動にまともしていると理解できる。現行の学習指導要領では音声言語を基本とする学習活動となるように指導事項^②が示されており、次期学習指導要領においても、この姿勢は引き継がれていると考えられる^③。かかる状況からすれば、第五学年及び第六学年では音声言語による学習活動を基本として、古文や漢文に触れる機会と位置付け得るのであろう。

2-2 中学校教科書の掲載状況

中学校では五社五冊の全ての教科書が『竹取物語』を掲載している。

【東書・国語727】一年

①かぐや姫の誕生「いとう幼ければ、籠に入れて養ふ」

(現代語訳並記)

②五人の貴公子の難題譚(現代語) ↓ 別途五人の貴公子

の話題を解説

③帝の求婚

④昇天「天人の中にあわてぬさまなり」(現代語訳並記)

⑤終末(現代語)

〔学図・国語728〕一年

① かぐや姫の誕生「〜いとうつくしうてゐたり」（現代語訳並記）

② 冒頭からのあらすじ（現代語）

③ 帝の求婚「帝、かぐや姫を止めて〜帰らせたまひぬ」（傍訳）

④ 昇天「宵うち過ぎて〜羅蓋さしたり」（傍訳）、「ふと天の羽衣うち着せてまつりつれば〜御遊びなどもなかりけり」（傍訳）

⑤ 終末（現代語）

〔三省堂・国語729〕一年

① かぐや姫の誕生「〜いとうつくしうてゐたり」（現代語訳並記）以下、命名までのあらすじ

② 五人の貴公子の難題譚（現代語）

③ 帝の求婚（現代語）

④ 昇天のあらすじと原文「大空より〜ただしれに〜してまもりあへり」「過ぎ別れぬること〜空よりも落ちぬべき心地する」（現代語訳並記）

⑤ 終末（現代語）

〔教出・国語730〕一年

① かぐや姫の誕生「〜いとうつくしうてゐたり」「このちご〜裳着す」（現代語訳並記）以下、命名までのあらすじ

② 五人の貴公子の難題譚（現代語）

③ 帝の求婚（現代語）

④ 昇天のあらすじと原文「大空より〜あひ戦はむ心もなか

りけり」「ふと天の羽衣〜昇りぬ」（現代語訳）

⑤ 終末（現代語）

〔光村・国語731〕一年

① かぐや姫の誕生「〜いとうつくしうてゐたり」（現代語訳並記）

② 五人の貴公子の難題譚のあらすじと原文「これやわが求むる山ならむ〜この花を折りてまうで来たるなり」（現代語訳）↓別途五人の貴公子の話題を解説

③ 帝の求婚（現代語）

④ 昇天のあらすじ（現代語）

⑤ 終末（現代語）

五社に共通する教材化の傾向は、以下の三点である。

1. 「かぐや姫の誕生」の「いとうつくしうてゐたり」までは、現代語訳並記によって採録している。

2. 「終末」部分は現代語で教材化が行われている。

3. 物語全体の内容が把握できる。

これ以外では、「光村」を除く四社が「昇天」をあらすじと本文とで教材化している点が特徴的である。本稿では『竹取物語』の構成を五段落^④と整理して提示しているものの、構成把握には複数の案がある。阪倉篤義『「竹取物語」の構成と文章』に基づきながら全体を七段落の構成とする片桐洋一『新編日本古典文学全集』（小学館^⑤）と五段落構成とを対照すれば以下のようなことになる。

1…竹取の翁の紹介とかぐや姫の出生↓①【3】

2…五人の貴公子の紹介と、第一求婚者石作の皇子↓②

3…くらもちの皇子と蓬萊の玉の枝↓②
 4…阿倍の右大臣と火鼠の皮衣↓②【3】
 5…大伴の大納言と龍の頸の玉↓②
 6…石上の中納言と燕の子安貝↓②
 7…かぐや姫、御門の召しに応ぜず昇天↓③・④・⑤【3】
 片桐洋一は『竹取物語』に頻出する「3」との関連も見通した構成としているものの、本稿が示す五段落構成の基準となる阪倉篤義の十段落構成でも、ある程度の対応は取れており、破綻は来していないと言える。

基本的な文語文法に関する知識を理解する段階（第一学年・文語の決まりや訓読の仕方を知り）での学習教材であることを考えれば、本文と現代語訳とによって物語全体の理解を求めている点は中学校での教材化の特徴と言える。また、本文の教材化が小学校での既習部分とあわせて最小限に抑えられているのは、『竹取物語』の文体に関する問題も考慮する必要があるだろう。これは早くから指摘があるように、以下のような『竹取物語』の文体的な特徴が影響しているよう。

素朴で区切れの短い簡潔な文体で、石作皇子の段まで皇子に対しても敬語がないのに、車持皇子の段以後の文に敬語が増加し、かぐや姫にも使用されるようになるのは、この物語に必要以上に漢語が多いことと合わせて……漢文体に近い変体漢文体であった原『竹取物語』を訓読し和文化的なもの、現『竹取物語』であるとも考えられる^⑥。

また文法的にも難解な部分があるなど、本文を教材化するのには既習部分とおおむね問題が無い部分に限られているではない

か。小学校での既習部分とあわせることによって古典の学習への導入としての教材化がなされていると推察される。

また全社が物語の全体にほぼ触れるような教材化をしているのは、教材を通して古典作品を読むことの楽しさを知るようにしているとの解釈できよう。小学校・中学校・高等学校を通して三校種の重複教材でありながら、中学校全社の教科書が同様な傾向の教材化の方向性を示しているのには、このような教材化に対する共通した意識が存すると解することができよう。

2-3 高等学校教科書の掲載状況

高等学校教科書での掲載状況については、必履修科目「国語総合」での状況を、大きく二つのパターンから概観しておきたい。

まず中学校の掲載状況と同様に本文とあらすじによって物語全体を概観するような教材化を行っている場合である。

【第一・国総359】

- ①かぐや姫の誕生〔～音に聞き、めでて感ふ〕
- ②五人の貴公子の難題譚のあらすじ（現代語）
- ③帝の求婚のあらすじ（現代語）
- ④昇天〔八月十五日ばかり湯水飲まれず、同じ心に嘆かしがりけり〕
- ⑤終末のあらすじ（現代語）

次に既習部分を含む内容を抜粋して教材化している場合である。

【大修館・国総345】

- ①かぐや姫の誕生〔～音に聞き、めでて感ふ〕^⑦

【大修館・国総345】は【第一・国総359】が採録する①と同じ部分を掲載するものの、物語全体に関する理解を求める教

材化とはなっていない^⑧。

これら二つのパターンの掲載状況で共通しているのは、小学校教科書（二社）・中学校教科書（五社）で掲載されている作品の冒頭部分（冒頭、いとうつくしうてゐたり）を掲載している点である。対して小学校・中学校の教材化と異なる点は、掲載本文の部分については現代語での説明やあらすじがなく、あくまで原文を読むことが前提となっている点である。

以上のように三校種の掲載状況から、『竹取物語』の教材化において、次のような傾向が認められる。

1. 校種によってある程度の特徴がある
2. 段階を経て（あるいは重複教材として）学習すること
を意識した教材化がなされている

このような傾向は学習の目標や手引きにも反映されていないけれども、三校種で掲載されている教材として、段階を経た学習の有効性を図るには、どのような目標や手引きが有効であるのかを次に検討することにする。

3 学習の目標・手引きの検討

校種毎の目標と学習の手引き（学習課題等）とについて検討を行う。小学校については、掲載状況とあわせて検討を行っているので、ここでは中学校と高等学校の目標と学習の手引きとについて、掲載状況の分析を踏まえて検討を行う。

3-1-1 中学校の学習の目標・手引き

中学校各社の目標は以下の通りである。

〔東書〕

- ① 現代語とは異なる言葉や表現に注意して音読し、古典の世界に触れる。
- ② 古典の世界に描かれた人間の心のありようについて考える。

〔学図〕

- ① 語り手が伝えようとしたことを捉える。
- ② 内容を理解して音読し、古文特有のリズムを味わう。

〔三省堂〕

- ① 古文の仮名遣いやリズムに注意して音読し、古典の世界にふれる。
- ② 現代とのつながりを考えて読み、物語のおもしろさについて、自分の意見をもつ。

〔教出〕

- ① 物語について調べたり、話し合ったりして、そのおもしろさを理解する。
- ② 古典の仮名遣いに注して音読し、物語の内容を捉える。

〔光村〕

- ① 古典の文章（文語文・古文）を読み、興味や関心をもつてその世界に触れる。
- ② 仮名遣いに注意したり、リズムを味わったりしながら音読し、古典の文章に読み慣れる。

各社とも目標は二項目立てであり、順序の違いはあるものの「音読」（二重傍線）と教材の内容理解や面白さの把握に関わる項目（傍線）とからなる。前者の「音読」が目標で触れている

場合、その内容は、「三省堂」「教出」「光村」が「仮名遣い」について明示的であり、「現代語とは異なる言葉」と表現する「東書」も仮名遣いを意味しているとの理解が可能であろう。

また「リズム」は「学図」「三省堂」「光村」が明示的であり、「表現に注意」の「東書」も「仮名遣い」と同様に解することがある程度可能であろう。これらはいずれも指導事項で求められている項目であり、この両者を示しているのは「三省堂」

「光村」の二社で、これに明示的ではないものの「東書」を加えることができる。また「仮名遣い」のみに触れるのは「教出」、かたや「リズム」のみに触れるのは「学図」である。音声言語による学習の基盤を形成する活動は、小学校の指導事項を引き継いでおり、伝統的な言語文化関連の教材を扱う際に重視している事柄である。なお「音読」の活動によって求めている学習内容は「古典の世界に触れる」(「東書」)、「古典特有のリズムを味わう」(「学図」)、「古典の世界にふれる」(「三省堂」)の比較的「親しむ」系統であるのに対して、「物語の内容を捉える」(「教出」)、「古典の文章に読み慣れる」(「光村」)のように教材の内容理解のために「音読」が位置付けられていると解し得るものがある。これは「内容を理解して音読し」(「学図」)にも指摘し得る。

もう一つの「教材の内容理解や面白さの把握に関わる項目」については、各教科書の傾向には統一感がなく、内容理解や面白さの把握の方法には多様性が見られよう。

【東書】②古典の世界に描かれた人間の心のありようについて考える。

【学図】①語り手が伝えようとしたことを捉える。

【三省堂】②現代とのつながりを考えて読み、物語のおもしろさについて、自分の意見をもつ。

【教出】①物語について調べたり、話し合ったりして、そのおもしろさを理解する。

【光村】①古典の文章(文語文・古文)を読み、興味や関心をもつてその世界に触れる。

これらの指導事項の掲出順に着目するならば、「音読」活動が先行する「東書」「三省堂」と内容理解の事項が先行する「学図」「教出」「光村」とに分かれている。すべての教科書での採録が第一学年であることからすれば、『竹取物語』のあらすじを小学校教材やこれまでの読書に関わる経験から絵本などを通してある程度理解していると推測され、仮名遣いや文章のリズムを意識ながら音読を通して本文に親しむことを先行させることが穏当であろう。

次に学習の手引きについて検討する。各社の手引きは以下の通りである。

【東書】
読み取る

①歴史的仮名遣いや古典の言葉の意味、古典特有の文末表現に注意して、繰り返し音読し、暗唱してみよう。

②「もの知らぬこと、なのたまひそ。」(145・上4)とあるが、かぐや姫は、天人にどんなことを伝えたかったのだろうか。自分の考えを言葉で説明してみよう。

考えを深める

③この物語に見られる、千年以上たった今でも変わっていない人間の心のありようとは、どのようなものだろうか。話し合ってみよう。

【字図】

読み深める

1. 語り手が伝えようとしたことを捉えよう。
①絵本と原作を比べて、どのような違いがあるか発表しよう。

②「月の世界」と「地上の世界」とは、それぞれどのような世界として語られているか。表にまとめよう。

③語り手が、地上の人にとつてかけがえないものと考えているのは何か。次の点に着目して考えよう。(1帝の行動と言葉、2翁や姫の行動と言葉)

2. 内容を理解して音読し、古文特有のリズムを味わおう。

①『竹取物語』冒頭文の現代語訳を、傍訳を参考にして作り、ノートに書いてみよう。

②繰り返し音読して暗唱し、発表し合おう。

まとめ

①この物語が「竹取の翁の物語」となっている理由を書いてまとめよう。

【三省堂】

声に出して読もう

①歴史的仮名遣いや古典のことはに注意して、音読しよう。
考えを深めよう

①主な登場人物の行動から性格を想像し、それぞれの人物に対する自分の考えを書こう。

②この物語で最も悲しんだのは誰か、その理由とともに考えよう。
学びをひろげよう

①「月を思う心」「竹取物語」を参考にしながら、昔の人々の「月」への思いに対する自分の意見を二〇〇字程度で書こう。

【教出】

確かめよう

①『竹取物語』について知っていることを発表しよう。

②古典の仮名遣いに注意しながら、『竹取物語』の本文をノートに書き写し、音読しよう。

深めよう

①『竹取物語』について調べたり、話し合ったりして、そのおもしろさを考えよう。

読んでみよう

①星新一『竹取物語』、②『かぐや姫の物語』、③江國香織・立原位貫『竹取物語』

【光村】

確認しよう

①古典の文章を、リズムを味わいながら繰り返し音読しよう。
読み深めよう(摘録)

①仮名遣いに関する内容(言語事項)

②「けり」「たり」「なり」等の文末表現の違い(言語事項)

③「あやし」「いと」「あまた」などの現代との意味の違い
(言語事項)

自分の考えをもとう

①「蓬萊の玉の枝」に登場する人々の思いや行動について考えてみよう。喜びや悲しみなど、現代の人々に通じるところはないだろうか。

学習を振り返る

①古典の文章を読み、どんなところに興味や関心をもったか。
②現代の文章と古典とを比べ、どんな違いに気がついたか。いずれも項目を設けて学習目標との整合や学習内容の明確化が図られている。これらの中で特徴的な手引きをいくつか取り上げて分析する。

まず注目されるのは「**学図**」の「この物語が「竹取の翁の物語」となっている理由を書いてまとめよう」(まとめ)であろう。この手引きは単元名「姫の物語? 翁の物語? —竹取物語」と連動し、物語の主人公は翁であるのかかぐや姫であるのかを教材全体の課題と位置付けている。書名である『竹取物語』は翁の職掌と関わる呼称であり、かぐや姫の登場は翁の職掌と密接な関連を有していることが前提となっている。教材の基となる作品の本質とかわる重要な課題と言えるものの、一連の学習の手引き(読み深める「語り手が伝えようとしたことを捉えよう」①〜③)によって学習効果が得られるかは、さらなる検討が必要であろう。また内容の読解に関する手引きとしては、

【東書】②「もの知らぬこと、なのたまひそ。」(上・上

4) とあるが、かぐや姫は、天人にどんなことを伝え

たかったのだろうか。自分の考えを言葉で説明してみよう。(読み取る)

【学図】②「月の世界」と「地上の世界」とは、それぞれ

どのような世界として語られているか。表にまとめよう。(読み深める)

【三省堂】①主な登場人物の行動から性格を想像し、それぞれの人物に対する自分の考えを書こう。(考えを深めよう)

等をあげることができる。いずれも教材の内容を丁寧に読み取ることが求められる手引きの内容となっている。

発展的な内容の学習の手引きとしては、以下のようなものが該当している。

【東書】③この物語に見られる、千年以上たった今でも変

わっていない人間の心のありようとは、どのようなものだろうか。話し合ってみよう。(考えを深める)

【三省堂】①「月を思う心」「竹取物語」を参考にしながら、昔の人々の「月」への思いに対する自分の意見を

二〇〇字程度で書こう。(学びをひろげよう)

【光村】①「蓬萊の玉の枝」に登場する人々の思いや行動

について考えてみよう。喜びや悲しみなど、現代の人々に通じるところはないだろうか。(自分の考えをもとう)

いずれの手引きも古典の世界は遠く隔てられた世界なのではなく、生徒も登場人物や出来事に共感したり、現在でも変わることなく思いを寄せる自然物があることへの素直な感動を与え

られたりするような学習内容になっていると言える。「伝統的な言語文化」によって学びを深めたり広げたりするための要素が、このような学習の手引きとして位置付けられているのである。類似した手引きは「**教出**」の読書案内（読んでみよう）にも言えるであろう。このような絵本や教材、さらには現代語に訳されたもの、映像資料などの多様な受容回路を紹介することも、発展的な学習を実現する契機となる。

なお、手引きの中で「学習を振り返る」の項目を立てているのは「**光村**」のみである。学習過程の定着を図るうえで「振り返り」が重視されており、全国学力・学習状況調査の質問紙調査においても学習の「振り返り」が効果的に行われている場合には、学習内容の理解に対する有効性がある程度認められている。このような目標と対応させた「振り返り」の観点を学習の手引きとして明示しているのは、学習評価の際に有効であると言える。

3-1-2 高等学校の学習の手引き

二つのパターンで示した「**国語総合**」での学習の手引きは、以下のようになる。

【第1・国総359】

【かぐや姫のおひたち】

- ① かぐや姫のおひたちと成長の様子を、本文に即して整理してみよう。
- ② かぐや姫をいとおしむ翁の気持ちが表れている箇所を整理してみよう。

- ③ 次の傍線部の動詞の終止形と活用の種類を調べてみよう。

【かぐや姫の嘆き】

- ① かぐや姫の発言について、次のことを考えてみよう（1 かぐや姫が最も心にかけていることは何か。2 かぐや姫の心情を最もよく表している形容詞はどれか。）

- ② かぐや姫の発言を聞いた翁の反応をまとめてみよう。

- ③ 次の形容詞・形容動詞について、活用表を作成してみよう。

【大修館・国総345】

- ① かぐや姫の生い立ちと成長の様子を、本文に即して整理してみよう。

- ② かぐや姫が翁の子になってから、翁の生活はどのように変わったか。それがわかる三つの段落の要点を、それぞれまとめてみよう。

両者に共通する採録部分では、かぐや姫の生い立ちと成長の様子を、本文に即して整理する手引きがあげられる。いずれも本文を丁寧に読みながら内容を整理することが求められている。

また内容の理解に関わる手引きとしては、【第1・国総359】

の【かぐや姫のおひたち】②と【かぐや姫の嘆き】①②、【大修館・国総345】の②が相当する。つまり、文法事項に関わる手引きを除けば、すべて内容の理解に関する手引きになっているのである。それぞれがかぐや姫の心情や行動と翁の心情や

行動とを手引きで示している点は、教材を読むに際して主要な登場人物の心情の理解に学習の重点が置かれていると理解できる。このような手引きは小学校・中学校では設けられていない項目である。それだけに校種を超えた系統的な指導を意識して

教材を位置付けておくことが肝要なのである。

本章では文学史の位置付け内容を通覧して問題点を検討する。

4 文学史の記述に関わる検討

文学史に関する記述は小学校ではほとんど見られず、中学校・高等学校の教科書での記述が中心となる。中学校五社は以下の通り。

〔東書〕…なし(冒頭の解説文に吸収)

〔学図〕…平安時代初期に成立。作者未詳。『源氏物語』で「物語のいでははじめの祖」と評価された、我が国最古の物語。

〔三省堂〕…現存する日本最古の物語と言われている。作者はわからないが、民間に語り伝えられていた伝説をもとに平安時代の初め頃に作られたと考えられている。

〔教出〕…なし

〔光村〕…現存する日本最古の物語と言われている。民間に語り継がれていた伝説をもとに、平安時代の初めごろ作られたと考えられるが、作者はわからない。平安時代に書かれた「源氏物語」の中で「物語の出で来はじめの祖」と評されている。

また、高等学校では以下になる。

〔第一・国総359〕…伝奇物語。作者は未詳。伝承された説話をもとにして、十世紀中ごろまでに成立。現存する最古の物語である。竹取の翁の紹介とかぐや姫の出生、五人の貴公子の求婚、帝の求婚、かぐや姫の昇

天、という内容が、素朴で簡潔な文体で語られている。

〔大修館・国総345〕…物語(平安時代前期)。現存するわが国最古の物語。竹から生まれたかぐや姫が、五人の貴公子や帝の求婚を退けて、月世界へ昇って行く。

中学校・高等学校いずれにも記述されている内容としては「現存する日本最古の物語」〔三省堂〕〔光村〕〔第一〕他)である。また成立時期についても平安時代であることが基本的に明示されていると言えるだろう。一方で中学校の記述で強調されている内容として『源氏物語』との関係〔学図〕〔光村〕であり、高等学校の記述で強調されているのは「伝奇物語」〔第一〕)のような文学史のジャンルに関する記述である。その意味では、同じ物語としての共通性を持ちながら『源氏物語』との関連を示す中学校と、より専門性を有する「伝奇物語」と言う術語などで物語の特徴を示す高等学校での記述の違いが出ていると考えられる。なお、高等学校の教科書での文学史に関する記述で物語全体を扱いながら、文学史の記述でも教材をなぞるような記述がみられる。これは一社で複数の教科書を出しており、その中で作品の一部を教材化している場合もあることから生じた現象である。

このような傾向は現行の学習指導要領において、中学校第一学年に「(イ) 古典には様々な種類の作品があることを知ること」とあるから、「物語」という文学作品のジャンルを理解して、高等学校第一学年(国語総合)において「(ア) 言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について気付き、伝統的な言語文化への興味・関心を広げること」とあることを

受けて、これまでの既習内容をさらに深める教材として取り上げられている古典作品の特質を理解するための契機となるのである。文学史に関する記述を検討することは、現行の学習指導要領に明示されている「伝統的な言語文化」の指導内容を多様化してゆく上で重要な位置づけを有すると考えられる。「伝統的な言語文化」で示されている教材となる古典作品を示すならば、小学校は以下のような分類となる。

韻文…(文語調の)短歌・俳句(中学年)

散文…昔話・神話・伝承(低学年)、ことわざ・慣用語・故事成語(中学年)

その他…(親しみやすい)古文・漢文・近代以降の文語調の文章、古典について解説した文章(高学年)

このように小学校の指導事項では文学史のジャンルとなりうる表現で教材が示されている。しかも傍線部は(ア)の系統の指導事項であり、音声言語に基づく学習活動を想定したものと理解できる。この傾向は中学校の指導事項では薄れており、「作品の特徴を生かして朗読するなど」(第二学年)に相当する教材として『平家物語』が採録されていたり、「歴史的背景などに注意して古典を読み」(第三学年)に相当する教材として『奥の細道』が採録されたりするなど、教材の固定化が認められる。この傾向は次期学習指導要領においても大きな変更はない^⑩。教材の特性を生かしながら文学史の扱いを工夫していくことが求められている。

5 小結―系統的な教材化に向けて―

三校種にわたる重複教材、しかも同じ部分が教材化される傾向にある『竹取物語』の採録状況、学習目標・学習の手引き、文学史に関わる記述を取り上げて検討をおこなってきた。これらの結果を受けて、学習の系統性を持たせる工夫や連携の在り方を示して結びとする。

教材の採録と目標・手引きとの関連からすれば、小学校では作品冒頭の音読教材として位置付けており、音声言語に基づく学習活動が有効である。また教材が冒頭部分であることからすれば文法や語彙の難易度は低く、内容理解についてもある程度の可能性を有しているであろう。つまり第五学年での教材化は指導事項との対応も無理がないと言える。この学びを引き継ぐのが中学校第一学年での教材化である。

小学校での冒頭部分を中心とした暗唱・音読による学習を受けて、中学校段階では、『竹取物語』全体が教材化され、作品全体の理解へと学習が深められている。また学習内容も小学校での音読を継承しながら、登場人物や物語の面白さへの理解へと深化・拡大していく学習と言える。さらに自分たちの生活や考え方などと関連させた「昔の人のものの見方や感じ方を知る」(第五学年及び第六学年)の指導事項に相当する学習活動が可能となる手引きが示されている。これは「古典に表れたものの見方や考え方を知る」(中学校第二学年)にも連接する学習内容である。これらの学習の手引きは探求的な活動と位置付けることができる。

高等学校での学習活動では、教材の表現を丁寧に読み取るこ

とを通して、登場人物の心情や行動に込められた意味を理解することが大きな眼目となっている。のみならず教材となる古典作品の文学史的背景を理解して、他の教材である古典作品との関連について考える契機となるような学習が望まれるのである。

国語科において、古典領域の教材に重複教材が多くみられる。古文では枕草子（春はあけぼの）、徒然草（序段）、平家物語（祇園精舎）等があり、漢文では論語がある。このほかにも韻文（短歌、俳句、漢詩）での重複も認められる。それぞれの校種で教材化されているには意味があり、既習教材として具体的な学習活動をおこなわずに終えてしまうのではなく、それぞれの校種においてどのような学習課題を設定することが、これまでの学習成果を活かし、学習内容を深化できるかを考えなくてはならない。

注

- ①使用教科書は、「小学校用教科書目録（平成29年度使用）」、「中学校用教科書目録（平成29年度使用）」、「高等学校用教科書目録（平成29年度使用）」（文部科学省、平成28年4月）掲載教科書を使用し、発行者番号、教科書記号・番号は全てこれによった。
- ②以下のような（ア）系統の指導事項となる。「読み聞かせを聞いたり」（第一学年及び第二学年）、「リズムを感じ取りながら音読や暗唱をしたり」（第三学年及び第四学年）、「内容の大体を知り、音読する」（第五学年及び第六学年）。
- ③新学習指導要領においては、「読み聞かせを聞くなどして」（第一学年及び第二学年）、「短歌や俳句を音読したり、暗唱したりするなど」（第三学年及び第四学年）、「古文や漢文、近代以降の文語調の文章を音読する」（第五学年及び第六学年）のように、（ア）の系統の指導事項は音声言語によ

る学習活動を示している。

- ④ 阪倉篤義校訂『竹取物語』（岩波書店、昭和45年）の段落構成を基にした。
- ⑤ 阪倉篤義『文章と表現』（角川書店、昭和50年）参照。なお、注④引用の阪倉篤義校訂『竹取物語』（岩波文庫）では、「1かぐや姫の生ひぶり、2貴公子たちの求婚、3仏の御石の鉢、4蓬萊の玉の枝、5火鼠の皮衣、6龍の頸の玉、7燕の子安貝、8御門の求婚、9かぐや姫の昇天、10ふじの山」の10段落構成をとる。5段落構成との対応は、①が1、②が2・7、③が8、④が9、⑤が10であり、これを単純化して5段落構成としている。
- ⑥ 中学校の国語科教科書が底本とするのは、すべて『新編 日本古典文学大集』（小学館）であることから、段落構成の比較対象に用いている。
- ⑦ 三谷栄一『竹取物語』の【文体】の項（『日本古典文学大辞典』、岩波書店、昭和59年）参照。
- ⑧ ここではあらずじなどの物語全体に関する記述は行われていない。
- ⑨ ただし、のちに触れるように文学史に関する記述の中で物語全体の構成に触れており、概観することは可能である。
- ⑩ ただし、次期学習指導要領では、小学校第1学年及び第2学年に「長く親しまれている言葉遊びを通して、言葉の豊かさに気づくこと」の指導事項が（イ）として追加されている。

〔附記〕

本稿は平成29年度信州大学教育学部附属次世代型学び研究開発センター公募の実践研究支援プロジェクト採択課題「新学習指導要領に基づく論理的思考を育むための読み方指導と教材分析」（代表者…白井敬「教育学研究科高度教職実践専攻・教育学部附属長野小学校」）の研究成果である。

（にし） かずお 信州大学）